

# アナキズムと主体の回復

——「災害ユートピア」を恒常化するために——

小川 真世\*

## 序

秩序のある社会とは何だろうか。なぜ様々な人のために考えられ、作られたはずの秩序によって、常に新たな問題が生まれ、それによって苦しめられる人々が絶えないのだろうか。それは一部の心無い人々によって秩序が保たれないからだろうか。正しい秩序さえ保たれば人は苦しまずに済むのだろうか。かつて何度も世界中で災害や戦争によって秩序が破壊され、新たな秩序が生まれるまでの間、無秩序な社会というものが生まれた。そこは明らかに過酷で、統制はなく、どこまでも不安定だった。しかし、そこでしか生まれなかったものも確かにあったのである。それは災害によって生まれ、かつてそこになかった世界という意味で、災害ユートピアと呼ばれた。それはその場にいただけの何でもない人々によって作られた、その場を生き延びるためにできた特別な共同体だった。人々は利他的で、創造的であり、絶望的な状況にあっても諦めず、できることを持ち寄り、意外にも楽しみながら耐え抜いたという。そしてそれが災害という無秩序の中で起きたということが問題である。秩序の中にはなく、無秩序の中に合ったユートピアは、一瞬の出来事であったとしても、なにか無視できない要素で満ちていたのである。

以下では、通常保たれている秩序とは何であるのか、そしてそれから離れた無秩序とは何であるのか、果たして災害ユートピアで一瞬現れた世界は恒常化できないのか、できるとすれば何がそれを作るのかについて論じていく。

### 1.1 問題設定

2020年5月、アメリカのミネソタ州ミネアポリスでアフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイドさんが白人警官によって首を押さえつけられ死亡した。これをきっかけに始まった人種差別抗議運動がBLM(Black

Lives Matter)運動である<sup>1</sup>。この言葉は「黒人の命も大切だ」や「黒人の命を粗末にするな」という訳をつけられる。アメリカという国が作られる前からの長い長い人種差別の問題であるが、なぜ人種差別は起き、特定の人種にだけあえて「命を粗末にするな」という生き物として当然のようなことが言い直されなければならないのだろうか。人間は平等に生きることができないのだろうか。

かつて何度か、短い間だけでも人々が平等であることができた瞬間があった。それは人々が大きな災害に見舞われた時である。平時には現れなかった平等が、災害の一瞬だけ現れたのである。それは災害によって生まれ、そこになかった場所という意味でユートピアであったため、災害ユートピアと呼ばれた。災害という極限状態でありながら、なぜ人が平等であることができたのか、そしてなぜ平時には平等が現れていないのかを考察し、そこから人が平等であることができたユートピアを生み出し、恒常化させる方法を探る。

## 1.2 研究史

ここでは、まず災害ユートピアというものがどのようなものだったのかを確認し、その平等の特徴を捉える。そして災害ユートピアというものが起こる前の社会、つまり現在私たちが生きている社会を理解するためにハーバースから社会の中の市民の主体について論じ、なぜ同じ人間の集まりである社会という公共圏とユートピアという公共圏が異なるのかを論じる。そして現代の社会からすると、平等であるという意味でユートピアに近い日本の小さな村という共同体は、なぜ災害ユートピアとは違ったのか、そして同じ共同体という言葉であるのになぜ異なるものなのかを論じる。最後に、そのような秩序のある社会とは別の、無秩序な社会を作り出そうとしていたアナキズムの思想からユートピアを作り出す主体について論じる。

---

\* 尚絅学院大学大学院総合人間科学研究科人間学専攻修士。本稿は 2021 年 1 月に同専攻に提出した修士論文を書き直したものである。

<sup>1</sup> 藤原学思「平等訴える #BLM なぜ人種も世代も巻き込んだのか」『朝日新聞デジタル』2020 年 6 月 21 日、<https://www.asahi.com/articles/ASN6L3495N6DUHB100T.html>、(2021 年 1 月 24 日閲覧)。

### 1.2.1 災害ユートピア——レベッカ・ソルニット

災害ユートピアとは災害によって社会の様々なものが破壊されたことによって立ち上がった、それまではそこになかった特別な共同体のことである。

以下の例は2005年8月のハリケーンカトリーナでのことである。

水や食料、おむつなどの支給を手伝い、逃げ遅れた人々の保護を買って出た若者たち。隣人を救出し、自分の家に避難させた住民。ボートで救出に乗り出した何百いや何千人もの人々。彼らは自衛のために武器を携帯しながらも、同時に深い同情心に駆られ、汚水の中に取り残された人々を発見し、安全な場所へと運んだ。被災の数週間後に、インターネットサイト(HurricaneHousing.org)を通じて、進んで赤の他人の被災者を自宅に受け入れた二〇万人もの国民。彼らは恐ろしい噂には耳を貸さず、被災者たちの悲惨な様子を映し出す映像に心を突き動かされた。そして、町の復興と再建に力を貸そうとメキシコ湾岸にやって来た、無慮数万のボランティアたち<sup>2</sup>。

そして、これは別の例、1906年のサンフランシスコ地震でのことである。

公園での三日目に、彼女は毛布とカーペットとシーツを縫い合わせてテントを作った。それは子供一三人を含む二二人に、雨露をしのぐシェルターを提供した。彼女はさらに飲み物用に空き缶を一つと食べ物用にパイ皿一枚で、小さなスープキッチンを始めた。(中略) または瓦礫で原始的なコンロを作り、人々は誰のためというのではなく、みんなのために調理をしはじめていた。<sup>3</sup>

レベッカは災害ユートピアをこう表現している。

現在の社会秩序は人工的な明かりに近いもの、すなわち緊急時には役に立たないパワーの一つだと考えることができる。代わって出現するのは、人々が助け合い、協力する、即席の地域社会だ。突然見えるようになった夜空の星がどんなに美しくても、今日、その明か

---

<sup>2</sup> レベッカ・ソルニット『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』高月園子訳、亜紀書房、2011年、9-10頁。

<sup>3</sup> 同上、27-28頁。

りを頼りに道を見つけられる人はいない。けれども、団結と利他主義と即時対応性でできた星座は大半の人々の中にすでにあり、大事な場面では、それが現れる<sup>4</sup>。

レベッカの言う災害ユートピアは既存の社会、秩序、場所などが破壊された後に生まれた社会である。これは誰にでも開かれた場所で、誰にも強制されない自由で平等な状態の中で、各々が必要に思ったことを互いのために行うという社会である。そして今まであった秩序が破壊されたという意味で無秩序な社会である。それが災害の現場という何もなくなった場所で、その場にいた人々によって作り出されたのである。

なぜ現代の社会秩序はユートピアのような利他主義や団結から遠いのだろうか。そして災害時に、平時とは異なる社会が作られるのはなぜだろうか。そもそも災害ユートピアに災害は必要なのだろうか。

社会という秩序の中では、人は自由に動けないのではないだろうか。秩序とは人を守るものでもあり、縛るものでもある。だからこそ災害により秩序が失われた無秩序な場所であれば、人々は自由に動けたのである。言い換えると、秩序は人々から自由と主体性を奪うのである。秩序に守られていることがない無秩序の中でこそ、人間は再び主体性を獲得し、自由に、そこになかった場所を自ら作り出すことができたのである。それがユートピアであった。

災害ユートピアに災害が必要なのかという問いに対しては、本来災害ユートピアには災害など必要ではなく、重要なのは人間、社会、生き方の無秩序を肯定することのみであると私は考えている。そしてユートピアは誰にでも作り出すことができる。ユートピアは政府ではなく、ただの市民が作ったのである。無秩序を保つためにも、市民が主体性を手放さないためにも、政府という秩序が作るのではなく、市民が無秩序に作ることが重要であるだろう。

災害ユートピアについて検討することは、社会の秩序によって生まれた差別や不平等に満ちている、という現状から脱する可能性を探ることもあると言えるのではないだろうか。もしユートピアが恒常化できれば、失った主体性を再獲得した人々による社会ができる。そこには利他主義、自由、平等、人々の主体性というものがあるだろう。災害ユート

---

<sup>4</sup> 同上、23頁。

ピアを災害の時にしか現れない非日常、ここにはない場所にするのではなく、どこにでもある場所という意味で恒常化することは可能なのかを考察していく。

### 1.2.2 公共圏論——J・ハーバーマス

勅令で禁止されている判断は、「公然たる判断」とよばれているが、それは問題なしに公権力の領域とみなされてきた公共性を指して言われている。しかるにこれは今や、公権力から分離したひとつの民衆広場となり、ここで公衆として集合した民間人が、公権力を公論の前へ引き出してその正当性の証しを求めるようになるのである。公儀は公衆へ発展し、臣民(subjectum)は主体(Subjekte)となり、政府の下知の受け手は、政府との契約の当事者となる<sup>5</sup>。

いずれの場合にもそれは「審判する」公衆なのである。公衆の批判にゆだねられる事柄は——「公開性」(Publizität)を得る。(中略)批判そのものも「公論」(öffentliche Meinung)という形で現れるが、これも、一八世紀に《opinion publique》を模して作られた語である<sup>6</sup>。

ユートピアは誰にでも開かれた公共の場と呼べるものだった。しかし私的ではなく公的という意味での「公共」とは言っても、政府によって開かれたものではなく、市民によって作られたものだった。一度ブロッホのユートピア論を批判し、公共とはなにか、公共としての社会はどのようなものかという思想を辿ったハーバーマスから、公共圏というものとユートピア的な公共圏がどう異なるのかを確かめる。

ハーバーマスが批判したユートピア論とは、ブロッホの思想である。ブロッホのユートピア論は社会主義的であり<sup>7</sup>、様々なイデオロギーの理念と、もろもろの上澄みの規範的要素を集めて作られた希望的なもので

---

<sup>5</sup> ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄、山田正行訳、未来社、1997年、37頁。

<sup>6</sup> 同上、38頁。

<sup>7</sup> ユルゲン・ハーバーマス「マルクス主義的シェリング——エルンスト・ブロッホの思弁的唯物論によせて」(原著1960年)細谷貞雄訳『理論と実践〔新装版〕』未来社、1999年、521頁。

ある<sup>8</sup>とハーバーマスは言う。ハーバーマスはそれを、具体的なものではないと批判したが<sup>9</sup>、単にそのユートピア的意識を否定するのではなく、実現に伴う危険や新たな問題が避けられない以上、ブロッホのように思弁的ではなく、ユートピア自身が、その限界意識を成熟させる必要があると、現実的な変化の実現を目指す立場にいる<sup>10</sup>。

このハーバーマスの、ある意味でのユートピア論が、後のハーバーマスの公共圏論に繋がっていると考えられる。現実を捉えなおすため、今存在している秩序である社会を、公衆と政府という存在、公共圏というものとして整理しなおし、社会の中で生きる自身らの本来あるべき姿という、ここにはないものをハーバーマスは論じようとしたのではないだろうか。

ハーバーマスの表した公衆という存在は、市民に開かれているものという意味での「公共性」を有するものを批判する主体である<sup>11</sup>。公衆は論争し、民間人の側から意見を出し、その非公式の公衆の意見と政府の側による公式の意見のどちらにも共通した場合に生じるのが公論というものである<sup>12</sup>。このように、議論という方法で生み出された意見は、圧力によって生み出された合意とは違うものになるだろうとハーバーマスは言う<sup>13</sup>。

ハーバーマスの公共圏論を、秩序の中での現実的なユートピアの実現方法として考えると、議論によって意見が生み出されるということであり、それは市民によって主体的に社会が変化していくということであり、それはまさに現実的に、ここにはないものを作り出していく社会であると言える。

しかしこの関係が保たれ、常に公論によって求められている社会に向かうことは可能だろうか。公衆は政府の強制などに抗するために、公共性を有するものを批判し、議論し、意見を作る主体である。公衆の存在

---

<sup>8</sup> 同上、510-512 頁。

<sup>9</sup> 同上、529 頁。

<sup>10</sup> 同上、530-531 頁。

<sup>11</sup> 『公共性の構造転換』（上記注 5）37 頁。

<sup>12</sup> 同上、334 頁。

<sup>13</sup> 同上、335 頁。

する政治とは、公衆が市民の側から公論の一部を作り社会という全体を変化させ得る、民主的なものようではあるが、公衆という批判する存在がなければ、政府、または秩序というものは暴走するということがある。政府を暴走させないためには常に批判が必要であり、市民が強制からの自由を得るためには、常に政府を批判する公衆である必要がある。つまり政府により公衆であれ、と在り方を求められ、自由の一部が奪われるということであり、自由の一部を奪うこの政治によって公衆には永遠に自由が訪れないのである。政府と政治は自由を奪うのである。そして、秩序とはそのようなものであると受け入れ、自由と引き換えに政府を批判する立場になったところで、そこから現れる公衆の意見とは一体誰の意見だろうか。社会という個人の集団の中には必ず少数派の何らかの人々が存在するが、あくまで公衆という集団の意見が生み出される場合、少数の意見がどれだけ残り、反映されるのかについては常に疑問が残る。市民が議論したとしても対立の意見というものは絶えず出るだろう。それが少数の意見である場合は大勢の意見と対立するだろう。ここで言いたいのは、大勢の意見の方が大勢の利益になるため少数の意見を無視するのではないか、という憶測ではなく、現実的に意見の対立は常に避けられず、議論の中で公論が作られたとしても、必ず拾いきれない意見が出るだろうということである。それが公衆という全体の意見としてまとまると尚のこと少数の意見を拾い上げるのは難しくなるだろう。つまり、自由であることはなく、たとえ不自由を受け入れようとも、意見が無視されるというのが、公衆対政府という関係であると考えられる。それが政治という秩序である。公衆が正しく批判する社会とは、現実的なハーバーマスらしい、秩序の中での漸進的な変化を進める手段と言えるが、秩序が保たれ本質的には変わらない。表面的な変化の連続では辿り着けないところにユートピアはあるのではないだろうか。

この関係で健全な政治が行われ、秩序が保たれた社会が実現するのであれば、この思想は正しいように見える。公衆がいくら批判しようともそれは秩序ある社会のなかでのことである。根本的な政治という秩序の変化、あるいは崩壊は決して目指さず、その秩序の中で何らかの変化を求めた公衆が、自由のために強大な権力に抗い続け、主体を保ち続けることができるのならば、秩序の中での政治的な社会が成り立つだろう。この思想は常に崩壊しない秩序という前提の中で、その秩序を崩壊させ

ないためのものであり、これはそれだけで完結しており、簡単に崩壊しない秩序の中での変化の手段としては、正しいように見える。

しかし社会という秩序の中で批判する公衆の主体性は、どこまで保たれるのだろうか。政府に大きな権力を与えその行使を求めるという契約は、市民を弱らせると考えられる。たしかに市民には自らの力だけでは簡単にはできないこともあり、自分たちの代わりに働く政府に権力を渡し、政府という秩序に守られることによってさまざまなことが可能になり、社会の中で生きることが楽になる。だがそのことによって市民は自らが動くということを忘れ、あるいは放棄し、主体性を失うのではないだろうか。政治という市民と政府との契約は政府に力を与え、それが政府を秩序の保持者へと変える。自らで動く必要がなく、他者に任せたことの批判だけをするようになるシステムが、人を主体性から遠ざけるのである。ただ秩序の庇護を受けるのではなく、秩序のない場面でも、自らが動くということが、主体にとって重要なのではないだろうか。

もし政府という秩序の下で公共性を有するものを批判し議論する公衆という主体が恒常化しており、それが権力に対しうまく機能すると市民が感じていたのなら、災害で市民によってつくられたものも、小さくとも政府のようなものが存在し、それを批判する市民が存在する社会となっただろう。しかし災害ユートピアを見ると、権力を集中させ政府のようなものに頼る社会ではなく、あくまで権力を集中させるというシステムに頼らず、市民がバラバラのまま主体的に動く社会が生まれたのである。その場に政府がいなかったから、市民は自ら政府不在の無秩序な社会を作るしかなかったと言えるかもしれないが、政府は常に市民のいる「この場」にはいないとも言える。災害ユートピアに対してそうであったように、政府、または秩序はいつも後から来るのである。

政府が存在しないと確信できる場で人々は主体的であった。ユートピアの人々は、政府に頼らず自力で災害から生き抜くために主体性という力を取り戻し、できることをやり、互いを助け合うしかなかったのである。主体的であることができた共同体を「ユートピア」と呼ぶほど人々が主体性を失っていたのは、政府という権力に主体性を奪われていたからであったと言えるのではないだろうか。このことから政府という権力は市民から主体性という力を奪うものであると言えるだろう。そして政府という秩序のない場所でこそ人は主体性を獲得できると言うことが

できる。

ハーバーマスの公共圏は社会という秩序の中で開かれているものであり、ユートピアの公共圏は秩序の外、つまり無秩序の中で開かれているものであるという違いがある。無秩序の中では主体的にならざるを得ないが、政府という秩序の下では主体性という力は奪われる。あえて無秩序の中にあることで主体を保つことができると言える。秩序の外にある無秩序は人を支配せず、どこまでも開かれている。開かれているのだからユートピアは主体を保つことができる無秩序の公共圏だったと言えるだろう。

### 1.2.3 ムラ社会と公共圏——内山節

自然と人間が結び、人間が共有世界をもって生きていた精神が、共同体の古層には存在している。それが共同体の基層であり、この基層を土台にして時代に応じた、地域に応じた共同体のかたちがつくられる<sup>14</sup>。

日本の社会の様々な分断に抗して内山が活路を見出したのが、村社会的な共同体論である。一言に村と言っても様々な形があるため、以下ではあくまで村という社会全般に共通するような共同体のあり方のみ論じるに留める。なお、以下ではあくまで民衆という対等な関係の中でのことを論じるため、本家、分家という明確に上にある権力と民衆という関係についてはあえて触れない。

内山によれば村という社会は山や海の近くという自然のなかにあり、その共同体は自然との強いつながりを前提にする<sup>15</sup>。生まれた土地から離れ生きることが難しく、村に生まれ村の中で生き村で死ぬという一生があり<sup>16</sup>、土地と村民に簡単には離れられない深いつながりがある。かなり強い拘束がそこに生まれ、現代ではカタカナで「ムラ」社会と揶揄されるほどの息苦しさがある。まさに共に同じ体になるという字の通りの共同体がある。

息苦しくとも、ムラ社会はある意味で平等であろうとする。自然の中

---

<sup>14</sup> 内山節『内山節著作集 15 増補 共同体の基礎理論』農村漁村文化協会、2015年、49頁。

<sup>15</sup> 同上、49頁。

<sup>16</sup> 同上、185頁。

で生きること、天候によって各々の財産の不平等が避けられないという前提があり、その不平等を再分配によってなくし均一化を図るのである<sup>17</sup>。互いがうまく関係が続けていく工夫ともとれるが、これは優しさや同胞愛という単純なものとも言いきれない。再分配に応じない場合は村八分という状態になる。それは信頼がなくなり、発言権がなくなり、無視されるというものである<sup>18</sup>。作られた平等の危険性はここにある。縛り付け支配する平等に容易に変化するのである。

災害ユートピアでも現れたように、団結と利他主義は他人を救う。しかしそれが社会のルールという秩序になった場合は別のものである。再分配のシステムは機能し集団の中の個に過剰に権力が集中することもないが、ユートピアにあったような個の主体性は失われ、従わないと罰があるという相互扶助の同調圧力に支配される。

小さな共同体は権力を集中させないという面もあるが、小さくとも秩序によって作り出した共同体は個の自由を奪う。自由がないということは主体性も奪われている。ユートピアは全員が災害にあい不平等の前提で生まれたが、平等を作り出す秩序によって支配することはなかった。平等ではなく相互扶助によって平衡を保っていた。ユートピアがムラ社会のように平等を作り出す共同体にならなかったのは秩序の不在によるものだろう。であればユートピアを作るのは無秩序であると言えるだろう。

#### 1.2.4 アナキズム——栗原康

無秩序によって始まったユートピアにも、時間が経つにつれ次第に秩序と安定が望まれ、政府の救助を受け入れることによって元の生活の戻るようになる。望むにせよ望まないにせよ、その場になかった政府がユートピアに介入し、人々は安定と秩序を受け入れるようになるのである。ユートピアは安定と秩序を求めると消える。安定を求めれば求めるほど秩序は力を持ち、秩序に従う人間は限りなく不自由になり、ユートピアから遠ざかって行く。ユートピアが生まれる前の社会は秩序によって保たれており、安定している状態である。ユートピアをユートピアのまま保つのは不安定さ、無秩序であるだろう。秩序の支配がないことを

---

<sup>17</sup> 同上、184頁。

<sup>18</sup> 同上、49頁。

求める思想とは、アナキズムである。秩序のない不安定さとその無秩序を受け入れているユートピアは、アナキーである。アナキズムの視点からユートピアを見ると、ユートピアがどのようなものかわかるのではないだろうか。

アナキズムは支配のないことを望む主義である。政府や秩序は人を支配し自由を奪うものという発想があり、それを拒むため無政府主義とも訳されるが、共通しているのは支配され不自由になることを拒否することである。それは秩序の支配を否定し無秩序を肯定する思想でもある。

多くのアナキストの中でも、ここでは特に現代のアナキストである栗原の思想から現代におけるユートピアの作り方のヒントを探る。栗原の思想は一言で言えば、「一丸となってバラバラに生きる」<sup>19</sup>である。これはアナキズムの思想をよく表しており、労働運動とも訳される「サンディカ」の説明の中でこう言っている。「衝動はある、しかし命令はない。共鳴はある、しかし統一はない。バラけることを前提にして、ひとが群れあつまる」<sup>20</sup>。各々がバラけることを前提に、衝動のまま勝手にバラバラに動く。無秩序の中にあり、自由で主体的である。このように人は無秩序の中で無秩序に社会を作ることができるのではないだろうか。ユートピアはその好例だったと言えるだろう。

栗原は決められた中で支配され生きのびるのではなく、縦横無人に変化し生きていくことを暴力と呼ぶ<sup>21</sup>。支配を嫌うアナキズムは、暴力を禁止するという支配にも抗う。他人の支配によって生き延びるのではなく、生きたいと思えば主体的に生きることを選び<sup>22</sup>、自然のまま、自由に欲求のままに主体的に生きていくことを望むのである。

ここで単に「暴力(欲求)を肯定する」ことだけを強調してしまうと最悪の場合はテロリズムも認めることになるが、捉えようによってはユー

---

<sup>19</sup> 栗原康『アナキズム——一丸となってバラバラに生きる』岩波書店、2018年、160頁。

<sup>20</sup> 同上、154頁。

<sup>21</sup> 栗原康『現代暴力論——「あばれる力」を取り戻す』KADKAWA、2015年、14頁。

<sup>22</sup> 同上、15頁。

トピアも暴力と言えらるだろう。押し込められた欲求の解放(暴力の肯定)はユートピアでもあり、暴徒化でもあるという二面性が存在する。そういう意味ではレベッカは、ユートピアの市民に悪者などいないという前提で利他主義や愛と呼ばれるような暴力を肯定していたと言えるのである。

しかしもちろん性善説的に悪者がいないと簡単に言うこともできない。災害ユートピアは人間の善性が現れたものを取り上げただけと言われることもあるだろうし、実際に火事場泥棒という言葉もあるように、災害時には語られなかった大勢の何かの犯罪の被害者もいたことだろう。だが悪いだけの人もおらず、良いだけの人もいないとは言えるのである。人は時に良くないことをすることがある。人は何度も間違える。災害時に盗みやレイプを働くのも人間であれば、他人に尽くし暖かい場所と料理をふるまうのも人間である。そういう意味で人間は何か固定化することができない。人間とは多面的で無秩序である。人間は秩序によって押さえつけることができても、秩序によって固定化することはできない。人間が無秩序であるということは変えられず、その無秩序を受け入れるしかない。当然、間違える人間が作った法も権力も間違えることがある。間違いはあるという前提に立つことができれば、固定化も絶対化もせず、間違えたものは間違えたものとして何度でもやり直すことができる。それこそが秩序に縛られない無秩序な人間である。

人間も社会も無秩序であることが事実であるが、作り上げられた秩序は間違いであり幻想であり、確かなものはない。忘れがちであり、かつアナーキーな思想だが、幻想である秩序に縛られ支配されていることもまた幻想にすぎない。だからこそ本来の人間には何でもできるという自由がある。せつかく何でもできるのならば、人の間違いも利他主義も、人間は暴力を持っているものとして許す方が寛容であると言えるだろう。寛容さもユートピアの特徴であった。そしてユートピアの人々は、それまでそこになかったものとして利他主義という他人への寛容さも作り出したのである。寛容さを持つことからユートピアが始まるとも言えらるだろう。

また、災害という無秩序な状態からユートピアが起きることはある。しかし別の場所では犯罪も起きる。法も秩序も機能しない無秩序の状態において、歯止めを失った人々が欲求のままに行動してしまうことはあ

る。しかし秩序の中でも犯罪が根絶されることはなく、ユートピアだけがいつも追いやられている。どちらにしても良いことのみというわけにはいかないが、人が主体性を保てるのはユートピアだけである。寛容さと主体性、それを人々が無秩序の中で得たのは事実である。ユートピアの恒常化の意義はこのようなどころにあると言えるだろう。

### 1.3 方法論

ユートピアは無秩序の中から生まれたが、秩序が人の主体を奪い、ユートピアを破壊したということ論じた。では災害によって破壊された秩序とは何かを解き明かす必要がある。よって以下では、社会の秩序を画一主義と捉えたハンナ・アレントと、その社会に対して、共同体とは営為以前であるという意味で無為であると論じたジャン・L・ナンシーから、秩序、共同体というものを論じる(第2節)。

そして政府という秩序の存在しない主体的な共同体を作ったのがユートピアであるならば、政府という秩序がないという意味での無秩序を肯定するアナキズムにも目を向ける必要がある。アナキストであるブルードン、クロボトキン、大杉栄からは自我という主体の奪還、その自我による秩序への反抗から、無秩序の肯定について論じる(第3節)。

しかしアナキズムは個人の自由のための思想であるためエゴイズムとも近い思想である。しかしここでは個人の自由を過度に賛美し、ただのエゴイストが傍若無人にふるまうことを肯定的に捉えるのではなく、支配するものがないという意味のアナキズムが、自らにも支配されないようにエゴを捨て、自らからも自由である思想としての面を捉え、自由に生きるための一人の人間としての思想について論じる。一遍からは無我を、そして伊藤野枝、西田幾多郎、栗原からは何物にも固定化されず、しかし動的につながるという矛盾した社会を論じていく(第4節)。

最後に結論として、無秩序を肯定した自由な生き方から、ユートピアの恒常化について論じる(第5節)。

## 2. 秩序化と主体の強奪

先に述べたように(1.1.2)、社会の秩序化は人の主体を奪う。本章ではその秩序化と主体の強奪についてハンナ・アレントから捉える。そして

ユートピアは秩序の前にあり秩序に破壊されたと言えるため、秩序化される前の無為の共同体がどのようなものかをジャン・L・ナンシーから捉える。

## 2.1 ハンナ・アレント

災害によって破壊された社会の秩序とはなにか。ここでは、ユートピアを知るためにまずここにある社会を知る必要がある。それにはまず社会を作る人間とはどのようなものかを知り、そしてどのように秩序が作られたのかを読み取っていく必要がある。

アレントは人間の基本的な活動力について、「労働」「仕事」「活動」が基本だと言う。「労働」とは、物を消費しながら、成長し朽ちていくという生物学的過程に対応していくこと。それに対し「仕事」とは、人間が一定の永続性や耐久性のある物の「人工的」世界を作り出し、その中で安住の地を見つけようとする。ものに関わる二つとは別の「活動」とは物や事柄の介入なしに、人間同士で行われることである<sup>23</sup>。

社会とは、私的領域である家族と公的領域であるポリスとの境が曖昧になったことで勃興したものである<sup>24</sup>。古代のギリシアでは、家族という生存のために必然(必要)によって生まれ、その中ですべての行動は必然に支配される私的な領域があり<sup>25</sup>、それに対し、必然の支配から離れ自由である公的領域のポリスというものがあった<sup>26</sup>。家族の領域が広がったために私的領域と公的領域の境がなくなり<sup>27</sup>、代わりに勃興した社会というものはかつての家族のように人に必然を求めるようになった<sup>28</sup>。それは人から「活動」の自由を奪い、代わりに画一主義という規則を押し付けるといことである<sup>29</sup>。かつての公的領域で行われていた、他人の中で卓越し自分が何者かであることを表現する「活動」は、画一主義の支配する社会にとっては不要なものになり、他人と同じことをするとい

---

<sup>23</sup> ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房、2018年、19-20頁。

<sup>24</sup> 同上、59頁。

<sup>25</sup> 同上、51頁。

<sup>26</sup> 同上、53-54頁。

<sup>27</sup> 同上、19-20頁。

<sup>28</sup> 同上、64頁。

<sup>29</sup> 同上。

う意味での「行動」を行う者のみが求められる<sup>30</sup>という、必然のみが支配しているのが画一主義という秩序を押し付ける社会である。この画一主義という秩序は、人工物である社会の形を守る。それは人々から自由と主体性を奪って守られている秩序である。

災害が破壊した社会の秩序とは、この画一主義のことであったと言える。画一主義を秩序として守っていたのが市民社会であり、それが破壊され無秩序なものとして生まれたのがユートピアである。画一主義の支配によって不自由だった人々にとって、画一的に行動することを求められない自由はユートピアだったのである。生存のために各々ができることを行い、周りはずべてが壊され必要に満ちていたが、なにをすべきかを他者から決められることがなかった。このユートピアはまさに特別な共同体である。生存のために立ち上がった共同体だが、必然(必要)のみが求められるかつての家族とは異なり、何かができる人もできない人も混じり、そこにいる人々にはリーダーも存在しない。誰も支配せず、支配されないという平等の状態だからこそ、人々は自由にできることをし、したいことができるという特別な共同体になれたのである。

なぜ不自由である画一主義は秩序になったのだろうか。社会の秩序化は不変な社会を見せる。不変な社会は、全体のための個を作り全体の中に個を埋没させ、個から主体性を奪う。画一主義という秩序は人から主体性を奪う。社会の秩序は社会を作っている人間から主体性という人間性を奪うことで人間を機械のように扱い、安定した社会を作り上げる。その安定を求める人間の弱さが、人々自身から自由を奪うのである。明日も生きていくために安定したいと思うのは当然であるだろう。しかし安定を求めれば求めるほど、人は不自由に縛られてしまう。社会があるから人があるのも事実だが、人があるから社会もある。人工の社会というものに縛られ、人としての自由をなくしてしまいユートピアを求めるのであれば、安定から離れ、不安定という無秩序を受け入れる思想が必要である。ユートピアは様々な場所で作られ歓迎されたのである。人々が求めていたのは不変の息苦しさより、自由の解放感であったと言えるだろう。

---

<sup>30</sup> 同上、65-66頁。

## 2.2 ジャン＝リュック・ナンシー

共同体はわれわれに与えられている——あるいはわれわれが共同体に則って与えられ、そして放棄されている。それは更新すべき、通い合わすべき贈与であって、なすべき営みではない。しかし責務ではある<sup>31</sup>。

アレントの言うように、人は社会という共同体の中でどのように振る舞うべきかを固定化され、それに従わされてきた。社会を存続させるために有為であることを求められてきた。以下では有為とは逆の無為の共同体とはどのようなものかをナンシーから見ていく。

ナンシーの言う無為の共同体とは、私は他人が死ぬことも生まれることも代わることができないという人間の限界性を受け入れるのが共同体であって<sup>32</sup>、それは主体的に作ろうとして作った共同体ではなく、営為の前に既にあり与えられたものであるということである<sup>33</sup>。営為の前に既にある共同体を無為と言っているのである。

この共同体は人間全体としての共同体というものでもあるだろう。人が産まれたらそれが自分にとって何の関係もない人であったとしても嬉しいと感じることや、人が目の前で死ぬことに耐えられないと感じることがあるという人間の命としてのつながりである。それは社会に存在する区別やまたは差別という人工の区切りの前にあったはずの命の平等を思い出すことでもある。人間の共同体とは無為である。意味や営みとは後から考えられたものでありそこに意味などない。意味はなくとも命は平等にある。命の平等に立ち返り、人のつながりを取り戻したのが無為の共同体という思想であろう。

無為の共同体とユートピアは似ているが、秩序づけられ画一主義を押し付けるというアレントが批判するような「社会」とは違うものである。無為の共同体にあるのは、人間という以外なにも繋がっていないのに繋がっているという無償の信頼感である。それはあえて言うならヒューマニズムや愛と言われるものだろうか。なにもなくとも人は勝手に繋がれ

---

<sup>31</sup> ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』西谷修、安原伸一郎訳、以文社、2017年、64頁。

<sup>32</sup> 同上、28-29頁。

<sup>33</sup> 同上、64頁。

るのである。

無為という点から考えてみても、ユートピアは災害が起きた時にどのような対応をするチームを作り、誰がどの役割を担う、という風に作られたのではない。家が近かった、あるいはその場に居合わせただけの人が偶然災害にあったが、高い即時対応性や利他主義によって偶然生き抜いたのがユートピアである。だからこそユートピアは無為の共同体そのものである。誰のものでも誰のためのものでもないその無為の共同体のなかで主体的に、自分のためでなく他人のために働きながら災害の中を偶然生き抜いたのである。ユートピアは無秩序が生むと論じてきたが、その無秩序の中で人は断絶されておらず、無為の共同体として繋がっているとと言えるだろう。

### 2.3 小括

社会を守るための秩序である画一主義が人間の活動の自由を奪い、有為か否かで人間が区別されるという枠組みに人間を固定化する不自由な社会になった。社会は必要で有為な人間だけを求めるようになったのである。しかし本来、共同体は無為である。人間の社会は為すべき営みではない。人間の共同体はただ人間であるだけでつながり、後付けの政府や秩序以前に与えられているものである。共同体が無為であるのだから、共同体に存在する様々な尺度も無為であり、尺度のない状態での人間とは本来、自由であり平等である。ムラ社会を見ると、平等は自由を生まないが、ユートピアを見ると、自由は平等を生むようである。画一主義や平等という秩序に支配されなければ、人間は自由であり、自由であるからこそ主体的であることができる。秩序の外である無秩序にこそ、人間の自由という主体の回復があり、自由から生まれる平等もある。それがユートピアである。

人間は何度も永遠や不死という変わらないものを求めて秩序を作ってきた。しかしそれは自分の居場所を永遠のものにするという不可能な欲望である。永遠という絶対で静的なものはない。形あるものは必ず滅び、作られたものは必ず壊れる。壊れるからこそ新しいものが生まれる余地もある。そのような歪で動的な平衡を保って偶然生きてきたのが人間であると言えるだろう。自分が死ぬものだとして受け入れ、他人や子孫に自分の居場所を譲り、続いていく社会を目指さない社会には限界が来るだろ

う。この先の時代のためにも、エゴイスティックな社会ではなくユートピア的な利他主義が必要なのである。

### 3. アナキズム論

本節では支配を打ち破るアナキーな思想からユートピアについて論じる。支配のシステムについては前節で述べた通りだが、それから離れた無為の共同体は結果として現れるものではあるだろうが、きっかけとしてはあまりにも力がない。支配に抗うには力が求められる。歴史上、そのような支配に抗ってきたアナキストたちは多くいた。彼らは支配というこの場にあるものから離れ、ユートピアというこの場にはないものを求めたとも言える。アナキストの思想は、支配に抗う精神と個人のあり方、そしてユートピアの作り方の参考になるだろう。

#### 3.1 プルードン

アナキズムの父と呼ばれるプルードンは、アナキズムは永遠には続かないと考えていた。ユートピアもその名前の通り永遠には続かない。元の生活に戻り、必ず終わるからアナキズムとユートピアは似るのである。しかし一度なくなるがゆえに、アナキズムもユートピアも何度でも起こせる。以下では永遠に続かず終わるものだという諦めを持ちつつも革命を起こし支配に抗う精神を持っていたプルードンの思想から論じる。

個人主義的アナキズムと呼ばれるものを掲げていたプルードンは、何よりも個人の自由を尊重し、自由から平等が生まれると考えていた<sup>34</sup>。例として彼が批判したのは、労働者のブルジョアへの対抗手段の組織、結社である。結社はすべての不平等を標準化するため労働者の自由にとって桎梏であると批判した<sup>35</sup>。参加している個人のための労働運動が、勢力として個人の力を埋没させ、かえって個人の自由を奪うという矛盾を抱えた結社を批判したのである。

しかし彼は「文字通り完全な民主主義やアナキズムはどこにも存在

---

<sup>34</sup> プルードン「十九世紀における革命の一般理念」(原著 1851 年)渡辺一訳『世界の名著 53 プルードン バクーニン クロポトキン』猪木正道 勝田吉太郎 [責任編集]、中央公論社、1980 年、140 頁。

<sup>35</sup> 同上。

しないのである」<sup>36</sup>とされており、現実的なある種の諦めも持っている。この諦めが、ある意味アナキズムの支配のない状態を保っているとも言えるだろう。すなわち革命を起こしてもそのまま自らが権力の側に立ち替わらないという意味での支配のなさが保たれるのである。

災害ユートピアというアナーキーな状態も、完全なものとして永続化はできないだろう。無秩序な状態から生まれ、無秩序に存在するからである。そして、そもそもユートピアとはアナーキーな状態を作ろうと主体的に運動を起こして作ったものではない。災害の現場で一瞬だけ秩序の支配から自由になったその中で主体性を取り戻したというだけのできごとであり、時間が経つと必ず崩壊している。

ユートピアが永続化されてしまうことは、無秩序であったユートピアを秩序にすることでもある。それはおそらく相互扶助と平等が支配するムラ社会のようなものになるだろう。ユートピアはその名前の由来の通りに、どこにもない場所であるからこそユートピアなのである。

またユートピアの人々はいずれは日常に帰るため、そこでの他人との繋がりが一瞬であることを理解しており、ずっとその状態が続かないという諦めを持っていたのではないだろうか。そのニヒリズムのような態度があるからこそ誰とでも主体的に繋がることができ、そして逆に共同体に支配されることなく共同体から主体的に離れていくこともできると言えるだろう。無秩序の中だからこそ強く意識される現実的な諦めがある。それが無秩序の中という一瞬であれ主体を取り戻すのである。

ユートピアはあくまで非日常であるだろう。日常に帰りユートピアは終わるからこそ何度も起こせる。毎回同じ形にならず長さも変わるだろう。だからこそユートピア自体が秩序にならずにすむ。その諦めがユートピアにとって重要なのである。であるから常にあるという永続化ではなく、いつでも起こすことができるという意味で恒常化ができるはずのものなのである。

## 3.2 クロポトキン

以下ではアナキズムの立場から相互扶助を捉えたクロポトキンの、日

---

<sup>36</sup> プルードン「連邦主義的原理と革命党再建の必要について」(原著 1863 年)、『世界の名著 53』(上記注 34)21 頁。

本のムラ社会とは異なる無政府共産主義という視点について論じる。

クロボトキンの理想とした無政府共産主義社会とは、自由人により成立した相互の合意がある社会であり、いっさいの強要はなく、万人に対し平等であり、そこでは社会道徳を警察などにゆだねることなく、反社会的な行為を予防するというものである<sup>37</sup>。

互いが自由であるからこそ平等であり、強要もなく合意によって回るという社会に政府は必要ないという楽観的な社会観である。その楽観的な人間観から楽観的な社会が語られているが、プルードンと違いクロボトキンは完全な実現は不可能だと言っていない。日本のムラ社会がそうであったように、無政府共産主義は小さな村では実現可能であったためであろう。

ユートピアも楽観的に捉えると、無政府のまま自由であり平等であった人々が相互扶助によって成り立たせていた社会である。これを楽観的で現実離れしていると切り捨てることは簡単だが、そこには無為の共同体にあったような無償の信頼感に近いものがあるとも言える。ユートピアを起こしたのはその信頼感でもあっただろう。自由な人々が疑い合い孤立するのではなく、信頼し合い協力するというのがユートピア的であり、秩序の中にはなかった無秩序なのではないだろうか。

しかしあくまで無政府共産主義は終わるべきであると私は思う。無政府共産主義は政府とは別の力を持ちすぎるためである。大きなムラ社会のようになりかねないため、同調圧力という支配を始める前に終わるべきである。

そしてユートピアも永続性を持つ社会のように作られたわけでもないため、ユートピアも長続きせず終わるべきである。短い期間で終わるからこそ、ユートピアの相互扶助がムラ社会のような秩序にならずに済む。ユートピアが秩序に縛られずに無秩序のまままでいられるのである。

### 3.3 大杉栄

本節では大杉の「奴隷根性論」と「生の拡充」から個人の解放を可能にするアナキーな力を論じる。

---

<sup>37</sup> クロボトキン「近代科学とアナキズム」(原著 1912 年)勝田吉太郎訳『世界の名著 53』(同上)487-488 頁。

私たちは支配され、奴隷根性というものを植え付けられていると大杉は言う。これは征服され、殺される身の奴隷が生命だけは保たれ、義務はあれど何の権利もない状態にされたとしても、自分はその主人に従う運命だと諦めるといふ精神のことである<sup>38</sup>。この奴隷根性から解放された生のあり方のことを大杉は生の拡充と言う。

人間は自我という力を持っており、その力は、活動して生を拡張し充実させていくことを命じ<sup>39</sup>、自我は自由に思索し行動するものであり、それを捉えて育て、自我のままに自由に生きることを生の拡充と言うのである<sup>40</sup>。

従わされることを強要され、それが当然だと思わされる奴隷根性を植え付ける支配の仕組みは、現代にも残っている。社会の秩序である。秩序が人間を奴隷にし、秩序は人間から主体を奪う。主体を奪われた人間が自由に生きることを取り戻す力が自我である。それは、秩序から外れても自由に生きたい、という無秩序な人間としての始まりと言えらるう。

自分の中で何にも縛られていなければ、人間は何でもできる。無秩序なユートピアを作るのは無秩序な人間である。秩序に守られつつも縛られ主体が奪われた生き方をさせられていた人間が無秩序を肯定し、自我の力によって主体を奪還することも生の拡充と言えらるう。無秩序に生きることが出来る市民は、無秩序なユートピアも作れる。当然、自我の力によって主体を取り戻すため、その力はエゴイスティックな行動になることもあるだろう。しかし人間が縛られている状態からユートピアは決して生まれないのである。

最後に大杉の「自我の棄脱」について引用しておこう。

兵隊の後について歩いて行く。ひとりだけで足並が兵隊のそれと揃う。兵隊の足並は、もとよりそれ自身無意識的なのであるが、われわれの足並をそれと揃わすように強制する。それに逆らうにはほとんど不断の努力を要する。しかもこの努力がやがては馬鹿馬鹿しい無駄

---

<sup>38</sup> 大杉栄「奴隷根性論」『新編大杉栄全集 第2巻』ばる出版、2014年、58-59頁。

<sup>39</sup> 大杉栄「生の拡充」、同上、127頁。

<sup>40</sup> 大杉栄「生の創造」、同上、164頁。

骨折りのように思えて来る。そしてついにわれわれは、強制された足並を、自分の本来の足並だと思ようになる。

われわれが自分の自我——自分の思想、感情、もしくは本能——だと思っている大部分は、実にとんでもない他人の自我である。他人が無意識的にもしくは意識的に、我々の上に強制した他人の自我である。

百合の皮をむく。むいてもむいても皮がある。ついに最後の皮をむくと百合そのものはなんにもなくなる。

われわれもまた、われわれの自我の皮を、棄脱していかなくてはならぬ。ついにわれわれの自我そのもののなんにもなくなるまで、その皮を一枚一枚棄脱していかなくてはならぬ。このゼロに達した時に、そしてそこから新しく出発した時に、極めてわれわれの自我は、皮でない実ばかりの本当の生長を遂げて行く<sup>41</sup>。

自分のものではない自我によって支配されているため、自我を捨てねばならないと大杉は言う。自我を捨て、無我になることが本当の意味で何にも支配されないという状態なのである。次章では自我を捨てた思想と、そこからの主体の回復について論じていく。

### 3.4 小括

個人の自由を取り戻すのならば、人は個人のまま主体的でなくてはならない。しかし個人による活動でも、団体による革命でも、自由を完全に取り戻すことはできず、アナキーは終わり、何度も失われる。だが、自らの中で縛られていなければ、何度失われても、何度でも蘇ることができる。何度でも様々な方法で秩序による支配に抗うことができるのである。それを可能にする力が自我である。自らの中に植え付けられた他人の自我という支配を捨て、自らの生を生きる力が自我というものである。

社会の秩序によって人間は主体を奪われるが、秩序が支配する中で主体を回復するということは無秩序の勃興である。この無秩序を肯定することは人間の主体を肯定することであると言えるだろう。アナキズムは

---

<sup>41</sup> 大杉栄「自我の棄脱」『新編大杉栄全集 第3巻』ばる出版、2014年、128頁。

自由を求め、主体の回復を望んでいるため無秩序を肯定する思想なのである。そこからならユートピアもできることだろう。

#### 4. 主体の回復

人が社会の秩序によって守られ、他方ではそれによって支配されているにも関わらず、その支配に従い続けるのは、民衆自身が自由を放棄し、自発的に隷従するからであるとポエシは言う。その支配を打ち破るのに必要なのは立ち向かうことではない。ただ支配者の隷従に合意せず、何も与えないだけで自由が得られるのである<sup>42</sup>。

たいていの場合、支配されているのは自らでもある。大杉曰く、その奴隷根性を打ち破るのは自我であった。しかし打ち破るために抗うことも本来必要ではないのかもしれない。抗うと言うと力強さを連想しがちだが、梯子を外し、何も与えず従わないというだけの方法で人は自由になれるのである。それは力強さも反骨精神も必要としない、誰にでも起こせる最も強力な反抗である。

生の拡充は主体の奪還ではある。しかし自我(エゴ)という力なのである。他人を支配する力でもあり、自分だけが良ければいいというエゴイストになる可能性も秘める。それは支配のない状態を求めるアナキズムがエゴに支配されることと近いと言えるのである。大杉も言ったように、自我を捨てねばならない。無論アナーキーというものは一つの形だけではない。抗う思想もあれば、ただ支えるのをやめるという手段で支配をなくすこともできる。本節では自らのエゴにも支配されないという思想から、力強さも必要なく、やりたいことをただやるだけという無秩序な状態において、自らのエゴも含めた何者の支配もなく絶えず変化していく人間の主体と社会について論じる。

##### 4.1 一遍上人の思想と運動

人間は、自分の居場所にも永遠にも執着する弱い生き物である。その我への執着を我執と呼び、それを捨てようとした仏教の思想、そのなか

---

<sup>42</sup> エティエンヌ・ド・ラ・ポエシ『自発的隷従論』西谷修監修、山上浩嗣訳、筑摩書房、2020年、18頁。

ら特に捨てることを説いていた一遍の思想にエゴイスティックではない生の拡充のあり方が現れているのではないだろうか。

鎌倉時代の僧侶、時宗の開祖である一遍の念仏についての考え方は、「捨ててこそ」というものであり、これは平安時代に浄土教を広めた空也上人という僧侶の言葉を参考にしている<sup>43</sup>。救われるためや浄土に行くために念仏を唱えるのではなく、そのような理由を捨ててただ念仏を唱えるという考えの基での「捨ててこそ」である。何のためでもないことをしていたのである。

しかし「捨ててこそ」を人に説き全国を遊行していた一遍もまた執着心を捨てきれず迷うことがあり、こんなうたをうたっている。「世中をすつるわが身もゆめなれば たれをかすてぬ人とみるべき」<sup>44</sup>。自らが迷いながらいったい誰を捨てぬ人と言えるのだろうかといううたである。その迷いも捨て、すぐ後にこのうたをうたっている。「身をすつるすつる心を捨てつれば おもひなき世にすみぞめの袖」<sup>45</sup>。捨てる心さえ捨て、何もない状態だからこそ墨染めの袖のように真っ黒な世界で何でもできる、何にもなれるという思想に至ったのである。仏教とは仏の智慧というものを光として表現する宗教である。その仏教徒である一遍が仏の光という仏教の救いさえ捨て、何もかもを捨て去った真っ黒な世界に至ったところに意味がある。

もはや宗教者の思想という話ではない。これは人間としての生き方の思想である。秩序を捨てたとしても人は何の執着にもとらわれない無秩序な生き方ができるのである。

災害で起きたユートピアと、捨てる意思すら捨てることを目指した一遍の思想には、何もなくなるという共通点があり、何もなくなったからこそ何でもできるようになるという共通点がある。だが一遍は俗世から離れた中で我執を捨てるのではなく、俗世に居ながら捨てることを説いた<sup>46</sup>。捨てることは難しいが、一遍のように俗世に生きながら秩序を捨てることができれば、平時であろうともどこでも何度でも無秩序なユート

---

<sup>43</sup> 一遍『一遍上人語録』大橋俊雄校注、岩波文庫、1985年、34頁。

<sup>44</sup> 聖戒編『一遍聖絵』、大橋俊雄校注、岩波文庫、2000年、50頁。

<sup>45</sup> 同上。

<sup>46</sup> 『一遍上人語録』(上記注43)95-96頁。

ピアは起こせるだろう。捨てるとは難しいことではない。平然と保たれているものが実は偶然今も保たれているだけだという現実を理解し、そこに執着しないというだけのことである。

たしかに人の執着は捨てがたい。しかし長く続くものはあっても、いつかはなくなるという無常は現実である。無常とは遠い話ではない。まさに災害は無常の最たるものであり、永遠に思えるようなものや変わらないと思うようなものを何もかも壊すが、身近に考えても完璧に同じ毎日などない。日々絶えず変化しており、無常の中に人はいるのである。秩序という永遠が失われ、無秩序という無常が現れるのは、なにも特別な状況というわけではない。無常は常に現実であり、永遠は幻想である。

その無常を受け入れるのが執着を捨てるということである。秩序という永遠に見えるものも、実体は無常であり必ず壊れる。そして秩序によって守られている社会にも同じことが言える。無常しかない無秩序こそ現実である。無秩序を受け入れた時、まさに墨染の袖のように、真っ黒な世界で主体的に生きることができるのである。

そして、無常を受け入れユートピアを起こせるのは特別な人ではない。ありふれた何でもない人々が災害ユートピアの構成員になれるのである。実際に災害にあいユートピアを作る現場に立ち会うような特別なことも必要ない。秩序の脆さという現実の無常を知り、現実には絶対的な支配などなく、何をしてもよいという無秩序の中に自らがあることを受け入れるだけである。主体性を取り戻すのにそれ以上は必要ない。ここに、どこにいる誰にでもできるという意味でもユートピアの恒常化がある。

## 4.2 無常を生きる思想

無常を生きるとは、永遠という幻想を捨て、すべては変わり滅びていくという現実の無常を受け入れて生きることである。

秩序という永遠に守られていると、何をしても変わらないから何もしなくなり、それゆえ何かをする力を失い何もできなくなる。無常に放り出されると何をするかは自分で決めざるを得なくなる。以下では不安定に見える無常にあってこそ秩序に奪われた主体を取り戻して生きることができるということを論じる。

### 4.2.1 伊藤野枝

第3節で扱った大杉の恋人である野枝は、アナキストでありウーマン

リブの活動家でもある。彼女はとらわれるもののない無秩序な社会のあり方を求め、活動していた。以下では野枝の思想から論じる。

野枝は夫婦の関係について、互いを「理解」という口実のもとに、主に女性が「同化」を強いられた<sup>47</sup>、いつの間にか家庭の中で妻という型にはまった考えに変えられていく<sup>48</sup>、という家庭の支配を批判し、家庭に縛られないパートナーの関係を、フレンドシップというものに見出した<sup>49</sup>。互いを尊重する友情のような関係こそ互いにとって支配がないものと捉えたのである。野枝はこのように互いに支配がない人間同士の関係を中心のない機械と表現した<sup>50</sup>。それは大きな力に固定化されず、互いに固定化し合わず、パーツとしての人間は別の場所では全く別の働きができるという固定化のない人間という存在の仕方である。野枝は中心のない機械でも家庭に縛られないパートナーの在り方でも、固定化されるということ批判していたと言えるだろう。

人間に固定化を押し付けることは支配である。野枝は支配のない自由と平等を求めつつ、自らも自らによって固定化されない人間であろうとしたのではないだろうか。それがエゴの支配のない主体としての人間である。

#### 4.2.2 西田幾多郎

西田は仏教の思想から、自己と世界を絶えず変化するものとして捉えた哲学者である。西田は、あらゆる物は自己でありながら自己否定し続け、どこまでも変化しつつも存在するという動的な現実の世界のことを絶対矛盾的自己同一であると言う<sup>51</sup>。世界は絶えず変化し続け、永遠に同じものであり続けることはできない。以下で論じるのは常なものなどないという無常の世界である。

---

<sup>47</sup> 伊藤野枝「『或る』妻から良人へ——囚はれた夫婦関係よりの解放」堀切利高、井出文子編『底本伊藤野枝全集』第三巻、學藝書林、2000年、256頁（初出は『改造』第3巻第4号、1921年4月）。

<sup>48</sup> 同上、252頁。

<sup>49</sup> 伊藤野枝「自由母権の方へ」『底本 伊藤野枝全集』（上記注47）170-171頁。

<sup>50</sup> 伊藤野枝「『或る』妻から良人へ——囚はれた夫婦関係よりの解放」『底本 伊藤野枝全集』（同上）255頁。

<sup>51</sup> 西田幾多郎「絶対矛盾的自己同一」、『西田幾多郎全集 第九巻』岩波書店、1979年。初出は『思想』第202号、1939年3月。

その無常の世界の中で、しかし一つの世界であるための「世界新秩序の原理」とは、各自がどこまでも自己に即しながら自己を超えていき、一つの世界を構成するというものである<sup>52</sup>。物も世界もそうであるように、人間にも確かな、あるいは変わらない本質というものはない。

自らの確かな本質という意味での我(アートマン)というものに自らに縛られるのではなく、自己でありつつも絶えず自己から変化していく無我の人間こそ、自らを固定化せず、自己に即しながら自己を超えていく主体であり続ける人間の生き方である。

自己に即しつつも自己を超えていくとは自らを確かな秩序で縛らないという不安定な、言うなれば無秩序な状態である。自らが無秩序であるからこそ自己に即しつつも自己を超えていけるのである。それは人間は何者でもなく、だからこそ何にでもなれるということである。人間が何にでもなれるということは何でもできるということであり、人間が作るものもまた何でも作れるということでもある。社会という秩序に阻まれ今までそこにはなかったユートピアもまた作ることができるだろう。ただ確かな自分という幻想を捨て、無秩序を受け入れ無秩序な自らを生きるということが、そのままユートピアを作るということになるのである。

#### 4.2.3 栗原康

ここでは改めて栗原の「一丸となってバラバラに生きろ」を振り返る。それは自己を固定化せず、また他に対しても何も固定化しない主体によって作られる。自己の自由から他に対しての平等が生まれ、人は自らに対しても他に対しても自由で主体的のままであることができる。それが一丸となってバラバラに生きるという生き方である。バラバラであるが離れて見たときそれは一丸に見える。どこも固定化されず、平らではない、全体が歪に尖った一丸である。画一化され主体を奪われた社会とも違う、主体を奪還した自我による革命とも違う、何物にも支配されない無我の一丸である。それは自己否定しつつ自己を保ち何にでもなれる主体の一丸である。

変化は当然のものとして常に存在し、変化を起こす人間も常に変化していく存在であるという前提の無秩序な世界は、ここにはない場所を常に

---

<sup>52</sup> 西田幾多郎「世界新秩序の原理」、『西田幾多郎全集 第十二巻』岩波書店、1986年第4版(初版1966年)。

作っていける。確かなものがないということがここにはないものを恒常化する。ここにユートピアの恒常化があると言えるのである。

また、無秩序な人間が作るものは静的なものではないだろう。動的であり、作られたものも無秩序であるだろう。無秩序な人間同士による固定化されない社会を共同体という静的なものとは区別し、動的な協働の状態という意味で協働態と呼ぶ。ユートピアとは共同体ではなく協働態であるだろう。

### 4.3 小括

主体の回復とは自我の復活とは異なる。自我による革命は主体的ではあるが、その自我にすら縛られない自由な人間が何でもできるのが自己の主体の回復である。自我に縛られないとは、絶えず自己を保ちつつも自己を超えていき、自己否定しつつ自己でもあるという矛盾した主体である。自己を固定化しないことで人間は何にでもなれ、何でもできる無秩序な存在でいられる。固定化されず固定化しない動的人間による、バラけることを前提とした動的な集まりが、何度でも起きるということ指して、ユートピアの恒常化があると言える。

## 5. 結論

かつて様々な社会が作られた。しかしいつも何かの不自由がそこにはあり、不平等は常に存在した。長い歴史の中でも人間は完璧に良いものを作ることができなかつたのである。それは常に人間が矛盾し、間違い、ここにはないものを求めるからであるだろう。しかし作り上げた社会というものの秩序だけは固定化され、求められていたものから求められないものになっていくのである。静的な社会は動的人間には合わないのではないだろうか。時に起きる災害によってそれが浮き彫りになったように私は思う。

人々が様々な不平等にさらされ、平等を求めたとき、まず何が自らを縛っているかに目を向けるべきだろう。社会の中ではそれは画一主義であった。画一主義は幅広く、各々が自分のことだけを考え、自分にとって最もよいものを選んでいく、というものでもあれば、小さな共同体の中で全体の中での一部として突出することを許さず、絶対的な再分配に

よる平等を作り出すものでもあった。

有為な人しか求められない社会が、画一主義の社会である。有為な人しか求められない社会とは、社会に向かう目的があり、そこに向かうために必要な人を求めるということである。しかし人の間に本来そのような区切りなど存在しなかったはずである。無為の共同体という思想はこのことを思い出し、人間の平等さを人間に再度思い出させるのである。

社会は人が集まってできる。しかし人は一人で生まれることも生きていくこともできない。社会は人によって作られ、人は社会によって作られるはずである。本来対等であるはずの社会と人は、しかし対等ではない。社会に力を与え、人間から力を奪う異常な力がシステムとして存在するからである。アナーキーなエゴはこの社会の異常な力に反抗しユートピアを作ることができる。力がないと感じるのなら何も与えないというだけの方法で支配から逃れてもよいだろう。そこにユートピアがある。

社会も市民も不定形である。人が集まり社会が生まれ、社会があるから人が生まれる。一人の人間が同じ形のまゐることもなく、社会を構成する人々が変わらないこともなく、従って社会が同じ形のまゐることもない。どちらも固定化することは不可能である。人も人が作った社会も固定化できず、秩序として固定化できないという無秩序な世界を受け入れるしかない。

無秩序であることは秩序からの解放を意味し、その中で人は主体的に生きるしかなくなる。それは不安定ということでもあり、何よりも自由という意味でもある。自由を取り戻すには、無秩序をあるがままに肯定するしかないのである。そして自由がまた無秩序を生み、無秩序が主体性を生み、主体的であることができるという自由もそこに存在するのである。

一度無秩序を肯定した人々は、自由に生きられるという自らの生の拡充に気づくだろう。ただ生きのびることから、生きたいと思って生きるという生き方を知る。そして社会秩序や政治という権力に対して、自発的に隷従しないこともいづれ覚えるだろう。このようにして主体性を獲得した人間は、画一主義に抗い自由に生きることができるようだろう。画一的でないのだから、バラバラにしたいことをして自由に生きられる。だから社会が求めてきたものとは真逆の相互扶助によって成り立つ災害ユートピアのようなものを起こせる。一度起こせたのであれば何度でも起

こせる。

災害ユートピアをいつでも何度でも起こせるという意味で恒常化させることができるのがアナキズムの思想なのである。だからこそ、このアナキズムという思想を見直す価値があると私は思う。

BLM運動のさなか生まれたALM(All Lives Matter)という言葉は、すべての命に平等に価値があるという意味だった。BLM運動反対の言葉として奪われてしまったこの言葉の意味を、再度奪い返すべきだろう。すべての命は平等である。対立するのではなく対等につながるしか平和的な解決はないのである。支配する側でもなく、支配される側でもなく、互いに対等であると合意するしかない。それでもなお支配する側に居続けたいという人がいるのならば、ただ従わなければよい。人は小さな共同体であれば、政府などなくともどこでも助け合いながら生きていけるのである。それを教えてくれたのが災害ユートピアというものであっただろう。ユートピアをここに作りたいのなら、まずは人に従わずに好きなことをして、自由な自分の生を始めるべきである。